

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所より地域との連携の中で「人権を大切に・共に喜び合える・信頼の介護」を理念としてきた。玄関ホールに掲げてあり、職員は目にする機会が多い他、パンフレット表紙にも載せている。理念の実践に向けて職員は毎年介護目標を新たに活動に取り組んでいる。	運営理念については玄関ホールとパンフレットの表紙に掲げ、職員間での共有と実践に繋げている。今年度の実践に向けての介護目標を「カンファレンスの充実を図る」とし利用者の想いを受け止めるためにカンファレンスの進め方に工夫を凝らしている。家族に対しては理念に沿った取り組み姿勢を利用開始時に説明している。職員は理念の持つ意味や介護目標をよく理解し日々の支援に当たっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年度よりオープンガーデンの開放は再開したが、恒例のサン祭り、ボランティア行事等は新型コロナウイルス感染症対策のため、全て中止にしている。	地元区へ協力金を納めている。法人の代表者が地域住民でもあり細かな情報を得て地域の一員として活動している。新型コロナの影響を受け、地域の文化祭や各種ボランティアの来訪等は中止の状況が続いているが、初任者研修実習や高校生のサマーチャレンジ、専門学校生の見学等を受け入れ、利用者との交流の場を設けている。更に、年間を通し近隣の人々より季節の野菜や果物を沢山頂き馴染みの関係が築かれ、ホームの存在が浸透している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	サマーチャレンジのボランティア活動に協力した。出前講座の依頼を受けて地域の人々に認知症の理解・支援の方法を学んでいた。災害時には、地域の避難場所としての役割を担っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	併設の小規模多機能ホームと合同で年6回実施している。ホームの利用者の状況、行事の様子は、毎月発行のお便りと写真を合わせて参照していただき、七夕飾りやものづくりの飾りつけは実際に見て感想をいただく機会がある。	新型コロナの影響を受け令和2年度は書面での開催となっていたが、令和3年度より感染対策を取った上で併設の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で、また、対面で会議を開催している。2ヶ月に1回、家族代表、民生委員、市高齢福祉課職員、地域包括支援センター職員、複合施設職員等が集まり、複合施設全体の状況、利用状況、活動状況、行事予定、職員状況等を報告し、意見交換等も行いサービスの向上に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者へ施設の待機者数の報告をした。入居者を受け入れる際の情報提供を受けることもある。運営推進会議以外でも困ったことや分からないことがあれば都度相談して意見をいただいている。また職員は介護相談員の定期的な訪問時に情報提供をしている。	市高齢福祉課とはホームの空き状況等について情報共有したり、口腔ケアの取り組みについての点数加算等の相談をしている。地域包括支援センターとは入居に当たり利用者の心身の状況等について連絡を取り合っている。また、年3回、市の介護相談員の来訪が2名ずつあり、職員からの利用者情報に基づき傾聴を主に利用者と交流し、顔なじみの関係となっている。介護認定更新調査は調査員が来訪し職員が対応している。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体的拘束適正化検討委員会を年4回、研修を2回開催している。拘束について職員は学ぶ機会を持ち、日常的なケアを振り返ることが出来た。利用者の安全の為、主に夜間はセンサーを設置している。	年4回の身体拘束適正化委員会の実施に合わせ、そのうちの年2回、身体拘束・虐待防止についての研修を行い、拘束に対する知識を高め拘束の無い支援に繋げている。玄関は日中開錠されている。帰宅願望の強い利用者があるがホールでテレビを見たり他の利用者と話を楽しんだりして気分を穏やかにしている。また、転倒危惧のある利用者があり、家族と相談の上、夜間のみ足元センサーを使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	年2回の研修を実施している。職員は虐待について、日々のケアの中で注意や改善する必要がある事柄を話し合った他、虐待に至る人間の心理について考える機会を持った。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用している利用者、家族との関わりを通して学ぶ機会があった。今年度、制度を活用する親族の依頼を受けて、日常生活上の情報提供にも協力した。更に制度の理解を深めることが出来た。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結の際は、契約内容と重要事項の説明を行っている。家族の要望や不安なども一緒に確認している。料金の改定があった際は書面でお知らせしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会がある時、職員は積極的に話す機会を持っている。今年度は面会制限があるため、電話やメールでの確認が多い。介護相談員の訪問時は利用者一人ひとりとゆっくりと話していただく機会がある。意見や要望はスタッフ会議で検討してサービスに反映している。	家族の面会については事前に連絡を頂き玄関先での短時間での面会を行い、合わせて電話やメールを用いきめ細かく連絡を取り合い、家族との関わりが途切れないようにしている。また、ホームでの生活の様子は毎月発行されるお便り「サンだより」でお知らせし、廊下には「サンだより」を大きく拡大して掲示し運営推進会議のメンバーにも見ていただいている。年1回開催していた家族会もコロナの影響を受け中止の状況が続いているが、誕生日や敬老会には家族から花や洋服のプレゼントが贈られているという。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月実施しているスタッフ会議は、代表者を含めて全職員の参加を目標に決定している。項目を設けて意見や提案を出しやすくしている。職員が普段感じる不安や改善が必要と思うこと等、活発に意見交換し解決することが出来ている。	月1回、全職員が出席出来る日を選びスタッフ会議を開催している。代表者からの話、行事計画、反省、研修報告、検討事項についての意見交換等を行い、運営の向上に繋げている。また、カンファレンスを全職員出席の下、月末に行い、利用者一人ひとりのケア内容の充実に努めている。更に、職員は期初に年間の自己目標を立て年度末に自己評価を行い、会議の中で成果を発表している。そのような中、必要に応じ、随時、代表者や施設長との意見交換の場を持ち、困りごと等の相談も行い職員一人ひとりのモチベーションアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は職員の得意なところで活動出来る機会を設け、係手当てとして反映させている。資格手当等、勤務体系の見直しをして、資格取得への意欲向上につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	全ての職員に研修を受けることを勧めている。希望する研修がある時はそれを優先している。新型コロナウイルス感染防止の為にリモートや施設内の研修を充実させ研修参加に取り組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者は県や市で行っている連絡会等に参加している。また職員は実践者研修などを受講し同業者との交流の機会がある。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの導入前には訪問の機会を持って顔なじみの関係を築くことに努めている。サービス導入時には家族と職員が同じ説明と対応に心掛けて安心して生活がスタート出来るようにしている。利用者の不安や心配事は何か、表情や話す内容からも理解するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族、利用者が共に納得し、施設入所ができることは、その後の利用者のお生活において大事であることを理解していただいている。家族の状況や思いを受け止め、協力していただきたいことは明らかにして、力を合わせての関係作り心掛けています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の意見や要望は記録に残している。職員はカンファレンスで必要な支援について話し合っている。ありのままを記録に残して、利用者と家族が望む生活に近づけられるように、意見や要望は最大限サービスに反映している。		
18		○本人と共に過ごす支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者と共に過ごす歳月の中で、支えられ教えられることが多いことを知っている。利用者のありがとうの一言や、その笑顔に支えられていると感じる職員は多い。「にやりほっと」の取り組みから、利用者の喜びや楽しみを共感することが出来た。職員も感謝の気持ちを言葉にしている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルス感染症対策を実施しながら、本人や家族の希望を受けて、面会できる支援につなげている。家族と受診や外出をして一緒に過ごす事が出来ている他、電話で話す機会を持つ利用者がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設の小規模多機能ホームから入所した利用者が多い。施設間の交流や自由な行き来ができています。遠方にいる家族や知人から手紙や贈り物が届いた際は、受け取った時の嬉しそうな表情を写真に残し、おたよりにして届けている。	家族より事前に連絡をいただいている親戚やお孫さんの来訪があり、玄関先で2メートル位の間隔を取り面会が実施されている。また、週1回程度、併設の小規模多機能型居宅介護事業所に出向いて音楽療法士による楽器演奏など、音楽療法を楽しむ機会を持っている。電池や雑貨品等、利用者の希望の物は職員が買い物に出掛け届けている。年末には手作り年賀状を作成して家族に発送し、家族からの利用者宛年賀状も届いている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が、お互いに気持ち良く関わり合い、支えあえるように、席を変えたりテーブルの位置を変更している。気の合う利用者が一緒に食事や入浴、レクリエーションや散歩など楽しんでいる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	季節の野菜や果物を届けてくれる家族や、近況を電話してくれる家族の思いに添い、利用が終了しても、その関係を大事にしている。また過去に利用した家族が新たに利用申し込みをしたり、利用開始するケースがある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者のほとんどが、自身の思いや希望を伝えることが出来ている。日々の生活の中で会話を重ね、その思いを表出する機会となっている。表情や動作からも確認できている。職員は情報交換し、希望に添えるよう努力している。	全利用者が自分の思いを伝えられる状況で、職員の声掛けに対しても言葉も含め表情や仕草で返答があるという。職員は入浴時やトイレ介助時、食後の寛いでいる時に会話を重ね、意向に沿えるようにしている。また、日々の支援の中で気づいた事を「にやりはっとカード」に書き留め、カンファレンスの中で話し合い、特筆したいものを「にやりはっと」として月々のお便り「サンだより」の中で紹介している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	サービス導入時に家族や本人等から情報を得ている。趣味や暮らし方、生活環境、サービス利用の経過を把握している。また日々の暮らしの中で教えていただくことも多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	タブレットのケア記録を導入した。水分摂取量、排泄状況は確認しやすくなった等、心身状態を細かく把握出来ている。日々の生活の中で、できること、できないことを職員は情報共有している。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画の作成はケアマネージャーが中心となり、利用者、家族から意見、希望、要望を確認している。ケアカンファレンス時に全スタッフの意見を確認して計画に反映している。緊急な対応が必要な場合には、状況に応じた計画に修正している。今年度はケアカンファレンスに臨む職員の姿勢を考え、ケアに反映していけるように介護目標に掲げて取り組んでいる。	3名の利用者を3名の職員で担当し、居室管理、日々の掃除、不足物の補充等を行い、毎月のカンファレンスの席上で意見を出し合いモニタリングを行っている。利用者、家族の意向を加味しながら入居時は2週間の暫定ケアプランを作成し様子を見て、その後、短期目標を3ヶ月としプランを作成し、状態が安定している場合は6ヶ月で見直し、変化が見られた時には随時の見直しを行い一人ひとりに合った支援に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの実践の中で工夫したことや気づいたこと、次のケアにつなげたいことを記録に残している。タブレットや業務日誌に記録する他、申し送りを利用し、職員全員が共有している。新たにサービス推進係を置き、情報共有の意識も高まった。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者や家族からの要望は可能な限り対応している。認定調査の申請、受診の付き添い、不足品の購入等様々な支援をしている。希望があり、併設の小規模多機能に Outreach 音楽療法を楽しむ利用者もいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	職員は身近な地域資源について学ぶ機会を持ち、理解を深めた。かかりつけ医、歯科医の往診は利用者の安心と家族の負担の軽減につながっている。サマーチャレンジ、出前講座において学生等、若い人たちと交流の機会があり、笑顔と笑い声が溢れていた。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は利用者や家族の希望で決めている。多くは利用開始前からのかかりつけ医を継続している。家族等からの依頼がある場合は、施設の協力医を紹介している。新型コロナウイルス、インフルエンザの予防接種や症状の変化に応じて、往診の依頼や看取りの協力体制を整える等、かかりつけ医との連携に努め、支援に当たっている。	利用契約時に医療機関についての希望を聞き、ホームとしての取り組みを説明している。現在、大半の利用者が入居前からのかかりつけ医を継続し、基本的には家族対応の受診となっているが、状況に応じ職員がお連れすることもある。若干名の利用者はホームの協力医を利用している。各種ワクチン接種については協力医が来訪して行っている。施設長が看護師でもあり、日々の健康管理と合わせ医師との連携もきめ細かく取っている。また、併設の小規模多機能型居宅介護事業所にも看護師が2名在籍しており万全な医療体制が取られている。歯科については必要に応じ協力歯科の往診で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は常に利用者の健康管理や状態の変化に対応している。職員は体調の変化に気付いた時は、ただちに看護師に報告している。併設の小規模多機能ホームの看護師の協力は支援を充実させている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際して利用者の情報提供をしている。スムーズな退院支援を、地域連携室や家族と連携を図りながら最大限努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期のあり方は、サービス導入時に本人、家族に確認している。また、その時々状況に応じての意向を確認して対応している。看取りを希望する場合は、主治医と連携して協力を受けられる体制を整えている。最後の時は、家族等の見守りの中で迎えられることを念頭に職員一同で支援している。	重度化や終末期に対する指針があり利用契約時に説明している。状況が変化し終末期を迎えた時には家族、医師、ホームで話し合いの場を設け、家族の意向を聞き、医師の指示の下、看取り同意書にサインを頂き看取り支援を行っている。開設以来22名の方の看取りを行い、最近の2年余りはコロナ禍の中の看取りであったが、家族には感染対策を取っていただき、また、最期の時を居室で共に過ごしていただいたことで感謝の言葉を頂いている。更に、職員にはその都度事前研修を行い、利用者や家族に寄り添った支援に当たっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	今年度は感染症の業務継続計画を作成した。職員はその内容を周知して、計画に沿って研修を行っている。AEDの点検は毎日行っている他、吸引器やAEDの扱い方を繰り返し学んでいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	今年度は災害時の業務継続計画を作成した。職員はその内容を周知し計画に沿って、避難の際の危険個所の確認、非常時、災害時における備蓄品の見直しをした。また避難方法は利用者毎に確認する等、具体的にすすめている。	6月に業務継続計画(BCP)に従い、「危険個所」「上からの落下物」等の確認をし、非常時に備え「石油ストーブ」「ガスコンロ」「水」「お米」「缶詰め」「おむつ」「毛布」「布団」等の備蓄品の確認も行った。11月には併設の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で出火場所を想定し水消火器を使つての消火訓練、利用者全員参加での避難誘導訓練、通報訓練、緊急連絡網の確認訓練、小規模多機能型居宅介護事業所との連携などについて確認を行う予定である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	今年度は記録の開示について学ぶ機会があった。プライバシーに関わる時は周りに見えないように、聞こえないように話しかけている。職員は言葉かけや、対応について話し合い、お互いに注意して改善につなげている。	言葉遣いには特に気を配り、スタッフ会議の中でも話し合い、職員同士で気づいたことは注意し合い、「やさしい」声掛けに徹底し、気持ち良く過ごしていただくようにしている。また、トイレ介助の際にはドアは必ず閉めるよう徹底している。呼び掛けは基本的に苗字か名前に「さん」付けでお呼びしているが、若干名の方は希望により「ちゃん」付けで声がけしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の多くは日常的に意思を伝えることが出来ている。思っていることや希望を話していただけるように会話したり、言葉で伝えられない場合は表情や動作から読み取るようにしている。誕生日には利用者の好みのメニューを取り入れている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝、起床できず、毎日遅れて食事を摂っている利用者に温かな食事を準備している。落ち着かない利用者に寄り添い、話を聞いたり散歩に出ている。また希望があり、併設施設での音楽療法を楽しんでいる利用者もいる。施設の暮らしに基本的な流れはあるが、利用者のペースを見守りながら対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その日の気分で、自分で決めて身支度をしている利用者がいる。介助が必要な利用者にはどちらが良いか選択してもらい決めることもある。季節に合わせた衣類を選べるように、クローゼット内を整理する支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好みや苦手な物、食べれない物を確認している。個々の状況や希望に合わせて食べやすさやむせない対応をしている。食事介助を必要とする利用者が増えたことで、食事介助の多忙さもあるが、目線を合わせての介助に努めている。利用者の苦手な物、注意が必要な物は記録して張り出しておくことで確認出来るようにしている。	自力で摂取できる方が三分の一強、一部介助の方が三分の一、全介助の方が若干となっている。柔らかめの常食の方が三分の二、ミキサー食の方が三分の一という状況である。献立は利用者の希望も聞き、4~5名の職員が1週間分の献立を立てホームの畑で収穫した野菜も使いながら調理している。朝食にはバナナを必ずお出しし、魚と肉が昼、夜ダブらないように意識した料理を提供している。誕生日には希望の物を出し、お彼岸には「おはぎ」等を楽しみ、七夕には「チラシ寿司」、クリスマスには「チキン」、正月には「おせち料理」等、季節感を味わえるように努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	タブレットの導入により、一日の食事量や水分摂取量が把握しやすくなった。利用者の好みや習慣、食べ方の状況によって、ミキサーにかけたり、とろみ剤を利用する他、食器を工夫して安全に、また食べやすいように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは義歯の洗浄を含めて、利用者の出来ない部分を補うようにしている。歯ブラシ、くるりナブラシ、歯間ブラシ、歯磨きティッシュなど、状態に合わせて使用している。歯間ブラシを活用して介助を続け、口臭が改善した利用者がいる。歯の治療は利用者の状況により、歯科医の訪問、協力を得ている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自分でトイレに行く利用者が多い。布パンツを使っている利用者もいる。支援の必要な利用者は、その行動や排泄パターンの確認により、トイレでのタイミングの良い排泄につなげている。	自らできる方が半数弱、全介助の方が半数強という状況であるが、全利用者がトイレでの排泄が出来ている。職員は利用者一人ひとりのパターンを把握しているので様子を見てトイレにお連れするようにしている。夜間についてはタブレット上の排泄記録を参考に介助に取り組んでいる。また、排便促進を図るべく朝食にはバナナと牛乳、乳製品を食していただき、お茶を中心にスイカ、梨、リンゴ等の果物を出来るだけ多く取り、1日1,000cc以上の水分摂取にも取り組んでいる。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取は一日を通して不足しないように心掛けている。起床時に希望する利用者には牛乳を提供している。また毎朝食にバナナを取り入れ、おやつは乳製品や水分摂取に心掛けている。排便の確認および記録と下剤の調節をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は利用者の希望を確認して、気分や体調に配慮して行っている。清拭、シャワー浴、洗髪など状況に応じた支援が出来る。入浴支援に時間と複数の介護者が必要になり、全員が毎日入浴することは出来ないが、利用者の希望に配慮して支援している。入浴の声掛けに嫌がる利用者も湯に入れば喜ぶので、一度断られても時間を置き、すすめている。	入浴は日曜日以外の週6日行い、基本的に利用者は週3回入浴している。入浴拒否の方がいるが誘い方に工夫をし、少なくとも週1回は入浴していただくように努めている。また、週6回入浴される方もおり入浴を楽しみにしている。合わせて入浴以外に週2回水虫対策で足浴をされている方もいる。季節によって「菖蒲湯」「ゆず湯」「バラ湯」等の季節のお風呂を楽しみ、隣村の温泉の足湯を楽しみに出掛けたりもしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な休息の時間が過ごせるように、利用者の希望に添い、支援している。室温等の室内環境や寝具の調節と清潔に配慮している。夜間は利用者の希望により、室内の明かりをつけたまま就寝してもらうことで、安心と安眠につなげている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の利用者が服用している薬の説明書はファイルにまとめて、いつでも確認できるようにしてある。服薬状況、薬の変更や追加は記録して全員が確認できている。誤薬の危険性に対応して、声だし確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ホール内のモップ掛けや広告を折ってゴミ入れを作ったり、テーブル拭きを手伝う利用者がいる。時々家は家に行き、一緒に過ごしたいと希望する家族の思いと、それを楽しみにしている利用者の外出支援をしている。食堂ホールではYouTubeを利用して懐メロや動物の動画等を楽しんでいる姿がある。併設施設の音楽療法に参加する楽しみもある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出支援は新型コロナウイルス感染症対策に配慮しながら実施した。施設の庭でお花見、日光浴、散歩、お茶会、シャボン玉遊び等を楽しむことができた。また畑の作物の成長や収穫を楽しむ機会を支援した。	外出時、独歩の方が若干名、手引き歩行の方と車いす使用の方がそれぞれ半数弱という状況である。天気の良い日に外に出てリンゴ畑を見ながら散歩したり、玄関先のいすに腰掛けテーブルを囲みながらお茶を飲み、外気浴を楽しんだりしている。今年度は新型コロナウイルスの感染対策を取りながら平日の人出の少ない時を選び、春と秋には小布施のハイウェイオアシスに花見と紅葉見物に出掛け、また、山田温泉での足湯を楽しみに出掛けるなど、ドライブも兼ね楽しいひと時を過ごしている。新型コロナウイルスの感染状況を見ながら可能な限りの外出支援を行っている。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を管理して甥や姪に小遣いを渡すことを楽しみにしている利用者がいる。「お金がない」と困っている利用者には、金庫に預けてあることを説明し、不足な物、必要な物の有無を確認している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	敬老の日や誕生日に届く手紙やお祝いを嬉しそうに受け取る姿がある。希望に添い、電話で家族と話が出来るようにしている。利用者が作成した年賀状を家に送り、家族から感謝の言葉があった。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂ホールでは多くの利用者が一日の大半を過ごしている。天窗からの陽の光が明るく、裏庭が広がり、開放感のある空間となっている。つるし雛や干支、手作りの四季の壁画を飾っている。ベッドにもなるソファで居眠りをしたり、昼寝をしている。TVを観て、気の合う人と話し、食事の献立表を見る楽しみのある場所になっている。空気清浄機を置き、室温や湿度にも配慮している。	複合施設前の広々としたスペースには花壇や広い畑があり花や夏野菜が栽培されている。また、玄関前にはイス、テーブルが置かれ外気浴やお茶を楽しむ寛ぎの場となっている。ゆったりとした広さが確保された食堂ホールは天窗が高く、明るい日差しが差し込み開放感が感じられる。廊下には写真入りの職員紹介と合わせ一人ひとりの利用者が一言コメント入りの写真で紹介されており、一つの家族として生活していることが窺える。壁には時間を掛けて制作された春夏秋冬や干支の貼り絵などの作品が飾られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールで過ごす席は、利用者の希望に配慮している。利用者間での関係で席を替える時は、カンファレンスで話し合い決めている。気の合う利用者が出るだけ一緒に過ごせるように、テーブルの位置にも配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には家族と相談して、使い慣れたテーブルや椅子等の家具を置いている。家族との思い出の写真も飾ってある。好きなスポーツをラジオで聞いている利用者がいる。思い思いの過ごす場になっている。	十分な広さが確保された居室は整理整頓が行き届き清潔感が漂っている。大きなクローゼットと洗面台が設置され暮らし易い造りとなっている。家族と相談の上、イス、テーブル、使い慣れた家具、テレビ等が持ち込まれ、また、家族の写真等に囲まれ思い思いの生活を送っていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせて、安全で使いやすいように、トイレや浴室の手すりの増設、畳コーナーをフローリングに変えている。自動ブレーキ車椅子や立ち上がりの為のバーを活用して自立への支援に努めている。車椅子の運転を妨げないように、障害物となるテーブルや椅子の位置に配慮している。		